
第14回 加齢皮膚医学研究会

プログラム 抄録集

会 期

2018年8月25日(土)・26日(日)

会 場

弘前大学医学部コミュニケーションセンター 2F 大会議室

会 頭

澤村 大輔 (弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座)

第14回 加齢皮膚医学研究会

プログラム 抄録集

会 期

2018年8月25日(土)・26日(日)

会 場

弘前大学医学部コミュニケーションセンター 2F 大会議室

会 頭

澤村 大輔 (弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座)

ご 挨 拶



8月25日(土)から26日(日)の2日間にわたり、弘前市の弘前大学医学部コミュニケーションセンターにおきまして、第14回加齢皮膚医学研究会を開催させて頂くことになりました。近年、超高齢社会を迎え、皮膚科領域でも高齢者の患者や高齢者に多くみられる皮膚疾患が増加していることは周知のとおりです。そのような状況から、本研究会が今後さらに重要になっていくと確信しております。

今回の加齢皮膚医学講座では、昭和大学医学部皮膚科学講座教授の末木博彦先生に糖尿病の観点から、また筑波大学医学医療系皮膚科学教授の藤本学先生に膠原病の観点から、加齢や老化のお話をいただけるものと期待しております。また、例年どおり、ロート賞受賞記念講演もありますし、共催セミナーでは、マルホ株式会社と株式会社ポーラファルマの協力をいただき、たくさんの先生のホットなお話をいただけると思います。

8月のお盆のすぐ後になりますが、青森県はだいぶ気温も落ち着き、過ごしやすい季節になっていると思います。さらに観光地や美味しいものもたくさんありますので、多くの先生方の参加を心からお待ち申し上げます。

弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座

会頭 澤村 大輔

開催概要

- 【会 期】 平成30（2018）年8月25日（土）・26日（日）
- 【会 場】 弘前大学医学部コミュニケーションセンター 2F 大会議室
〒036-8203 青森県弘前市本町40-1
<http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~mcc/>
- 【会 頭】 澤村 大輔（弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座）
- 【事務局】 弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座
事務局長 中野 創
〒036-8562 青森県弘前市在府町5
TEL0172（39）5087（直通） FAX0172（37）6060（直通）
E-mail kareihifu14@hirosaki-u.ac.jp
URL <https://14kareihifu-hirosaki.jimdo.com/>

関連行事日程

1. 世話人会・幹事会
日時：2018年8月26日（日） 9：30～10：00
会場：弘前大学医学部コミュニケーションセンター 1 F 小会議室B
2. 総 会
日時：2018年8月26日（日） 10：05～10：20
会場：弘前大学医学部コミュニケーションセンター 2 F 大会議室
3. 平成30年度 第12回ロート賞授賞式
日時：2018年8月25日（土） 14：05～14：20
会場：弘前大学医学部コミュニケーションセンター 2 F 大会議室
4. ロート賞受賞記念講演
日時：2018年8月25日（土） 14：20～15：20
会場：弘前大学医学部コミュニケーションセンター 2 F 大会議室

研究会参加者へのお知らせ

1. 参加受付

(1) 参加受付

弘前大学医学部コミュニケーションセンター2F大会議室前ロビーにて行います。

【受付時間】

8月25日(土) 12:00～18:00

8月26日(日) 9:00～12:00

会員受付で芳名帳にご記入下さい。参加費と引き換えにネームカード兼領収書をお受け取り下さい。氏名・所属をご記入の上、会場内では常時着用してください。

(2) 参加費（事前登録は行っていません）

参加費 5,000円

(3) プログラム・抄録集

会員の方には事前にお送りしておりますので、必ずご持参下さい。会場で購入される場合は、受付にて1部1,000円で販売致します。部数が限られておりますので、なくなり次第、販売を終了致します。

(4) ①日本皮膚科学会専門医 後実績

皮膚科専門医の方は、後実績受付でご記帳の上、「後実績参加証」をお受取りください。

【受付時間】

8月25日(土) 13:00～18:00

8月26日(日) 9:00～12:00

②機構認定専門医制度（新専門医制度）

加齢皮膚医学講座受講により1単位取得できます。

【受付時間】 8月25日(土) 12:00～15:35

⇒聴講単位が付与されるためには、各種講演の開催時間前（開催後15分迄）に受付をしていただく必要があります。この時間後の受付では、聴講単位が認められないので、ご注意ください。

⇒途中退席（お手洗いなどの一時退席を除く）をした場合、受講単位が認められないことがあります。

⇒日本皮膚科学会の会員証で入場を管理します。会員証を忘れた方には「仮会員証」を当日ご用意します。仮会員証を紛失した場合、再発行手数料（1,000円）の支払いを以って受講手続きが終了、単位取得となります。

(5) 加齢皮膚医学研究会入会手続き

学会期間中、入会受付デスクを設けております。

2. ご注意・ご連絡事項

- (1) 会場内での録音・写真撮影・ビデオ撮影は固くお断り致します。
- (2) 会場内では携帯電話などの電源はお切りいただくか、マナーモードに切り替えてご使用ください。
- (3) 大会議室は飲食禁止です（ロビーは飲食できます）。
- (4) ランチョンの昼食会場は小会議室Aとなります（セミナーとは別会場）。

演者へのお知らせとお願い

1. 口演時間

加齢皮膚医学講座講演	講演 40分、質疑応答 5分
ロート賞受賞記念講演	講演 12分、質疑応答 3分
一般演題	発表 7分、質疑応答 3分
症例報告	発表 5分、質疑応答 3分

＊時間厳守にご協力ください。

＊発表の10分前までに、次演者席に（会場内左側前方）にお越しください。

2. 発表データ受付

- （1）発表の1時間前までに会場前ロビーにあるPC受付にUSBデータをお持ちいただき、試写を行ってください。
- （2）持ち込みデータはUSBメモリーのみとさせていただきます。
- （3）ファイル名は【演題番号_氏名】としてください。

3. 発表について

- （1）ノートPCによる発表のみとさせていただきます。持ち込みノートPCやタブレット端末による発表はお受けできません。
- （2）会場に用意するPCはWindows 10です。使用可能なアプリケーションはWindows版Power Point 2016です。
- （3）文字フォントはOSに設定されている標準的なフォントを使用し、スライドは4：3で作成してください（横長で作らないでください）。音声は出力できません。
- （4）演台上にモニター、キーボード、マウスを設置していますので、ご自身でスライド送りをしてください。
- （5）日本皮膚科学会COIガイドラインに準じて、発表スライドの1枚目にCOI申告を掲載してください。

会場周辺地図および交通アクセス



■交通案内 弘前大学医学部コミュニケーションセンター 弘前市本町 40-1

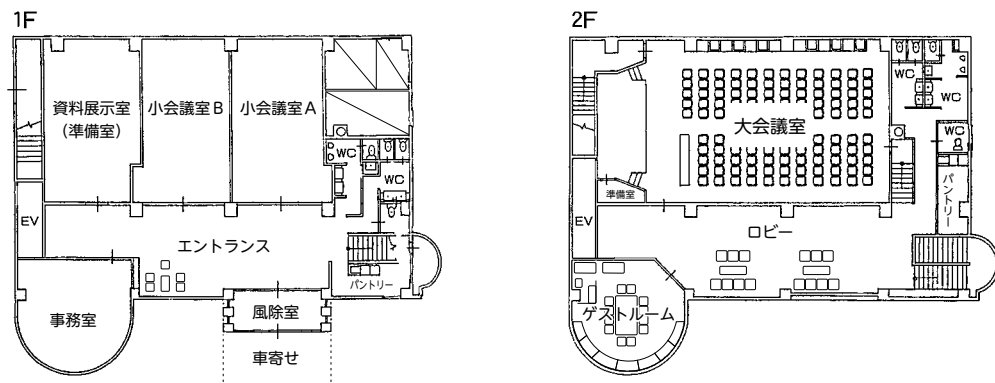
- JR 弘前駅

徒歩	約 35 分	
バス	約 15 分	6 番のりば駒越線「大学病院前」下車
タクシー	約 15 分	
- 弘前バスターミナル

徒歩	約 30 分	
バス	約 15 分	10 番のりば駒越線「大学病院前」下車
タクシー	約 15 分	
- 弘南鉄道

中央弘前駅から徒歩	約 7 分	
-----------	-------	--

■会場見取り図 弘前大学医学部コミュニケーションセンター



第14回 加齢皮膚医学研究会 プログラム

1日目 2018年8月25日(土)

14:00-14:05 開会式 〈大会議室〉

14:05-14:20 ロート賞授賞式 〈大会議室〉

座長：神保孝一（皮膚病総合医学研究所）

14:20-15:20 ロート賞受賞記念講演 〈大会議室〉

座長：神保孝一（皮膚病総合医学研究所）

1. 「性ホルモンが乾癬病態形成に及ぼす役割の解明」

京都大学医学部附属病院皮膚科 本田哲也（ほんだ てつや）

2. 「紫外線皮膚障害と発癌に対する新規治療ターゲットとしての ミトコンドリア分裂因子DRP1の機能解析」

北海道大学大学院医学研究科皮膚科学分野 柳 輝希（やなぎ てるき）

3. 「急性期褥瘡に対する新たな治療法の開発」

群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学 上原顕仁（うえはら あきひと）

4. 「ヒト皮膚におけるT細胞多様性の加齢に伴う変化」

筑波大学医学医療系皮膚科 吉岡華子（よしおか はなこ）

15:20-15:25 休憩

15:25-16:55 加齢皮膚医学講座 〈大会議室〉

座長：澤村大輔（弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座）

I. 「年齢からみた膠原病」

筑波大学医学医療系皮膚科学教授 藤本 学（ふじもと まなぶ）

II. 「糖尿病皮膚におけるaccelerated aging」

昭和大学医学部皮膚科学講座 末木博彦（すえき ひろひこ）

16:55-17:00 休憩

17:00-17:50 一般演題①

〈大会議室〉

座長：松崎康司（弘前大学医学部附属病院皮膚科）

1. 「群馬大学皮膚科における早老症6例のまとめ」

上原顕仁（うえはら あきひと）、茂木精一郎、関口明子、石川 治
（群馬大学医学系研究科皮膚科学）

2. 「Epitope spreading現象によって抗BP180 NC16a抗体が陽転化した dipeptidyl peptidase-IV阻害薬関連水疱性類天疱瘡の3例」

眞井洋輔¹（まい ようすけ）、西江 渉¹、泉健太郎¹、葭本倫大¹、森田裕介¹、
渡邊美佳¹、豊永愛恋¹、氏家英之¹、岩田浩明¹、藤田靖幸¹、乃村俊史¹、
松村和子²、清水聡子³、清水 宏¹
（¹北海道大学 大学院医学研究科皮膚科、²独立行政法人地域医療機能推進機構 札幌北辰病院
皮膚科、³市立札幌病院 皮膚科）

3. 「アロネーシス（痒覚過敏）の分子メカニズムの解明と治療法の開発」

富永光俊¹（とみなが みつとし）、本田耕太郎¹、高森建二^{1・2}
（¹順天堂大学大学院医学研究科環境医学研究所、²順天堂大学医学部附属浦安病院皮膚科）

4. 「ヒト皮膚線維芽細胞におけるコラーゲン受容体・ Discoidin domain receptor 2と細胞外マトリックス形成」

蓓 泰幸（しとみ やすゆき）、石渡潮路、桜井哲人、松熊祥子
（株式会社ファンケル総合研究所）

5. 「T細胞の抗原反応性応答の加齢変化」

吉岡華子（よしおか はなこ）、渡辺 玲、藤澤康弘、石塚洋典、中村貴之、
沖山奈緒子、藤本 学
（筑波大学医学医療系皮膚科）

17:50-18:00 休憩

18:00-19:00 イブニングセミナー 共催：マルホ株式会社〈大会議室〉

座長：山本俊幸（福島県立医科大学医学部皮膚科学講座）

「発汗機能に着目した保湿剤による乾燥性皮膚疾患治療」

川崎医科大学皮膚科学 青山裕美（あおやま ゆみ）

座長：岡 昌宏（東北医科薬科大学医学部皮膚科学教室）

「ヘルペス感染症の病態と治療の最前線」

山梨大学大学院総合研究部医学域臨床医学系 皮膚科 川村龍吉（かわむら たつよし）

19:00-20:00 懇親会 〈小会議室AB〉

2日目 2018年8月26日(日)

9:30-10:00 世話人会・幹事会 〈小会議室B〉

10:05-10:20 総会 〈大会議室〉

10:25-11:15 一般演題② 〈大会議室〉

座長：原田 研（青森県立中央病院皮膚科）

6. 「疣状乾癬にアプレミラストが著効した1例」

岡崎沙麗（おかざき さり）、大澤梨佐、中島英貴、佐野栄紀
（高知大学医学部皮膚科学講座）

7. 「メトトレキサートの過剰摂取により生じた多発口腔潰瘍」

森 直哉（もり なおや）、牧野輝彦、原 寛、虎井僚太郎、清水忠道
（富山大学大学院医学薬学研究部皮膚科学）

8. 「UVA曝露ヒト真皮線維芽細胞における ヒアルロン酸分泌低下を引き起こす分子生物学的メカニズム」

芋川玄爾（いもかわ げんじ）、寺澤周子、佐藤より子、庭野隆夫
（宇都宮大・バイオサイエンス教育研究センター）

9. 「3重複癌を合併した抗TIF1- γ 抗体陽性皮膚筋炎の1例」

浅野伸幸（あさの のぶゆき）、下村 裕

（山口大学大学院医学系研究科皮膚科学講座）

10. 「角層DJ-1を用いた体内の酸化ストレス評価」

高橋理子¹（たかはし みちこ）、鈴木民恵¹、石渡潮路¹、村上礼一²、
秋田美季²、宮川泰子²、三上正治²、八代 壇²、斎藤芳郎³、野口範子³、
松熊祥子¹

（¹株式会社ファンケル 総合研究所、²医療法人三良会 青い海公園クリニック、³同志社大学
生命医科学部）

11:15-11:20 休憩

11:20-12:00 一般演題③

〈大会議室〉

座長：野村和夫（青山のむら皮膚科）

11. 「高齢女性に生じた痛風結節の1例」

伊藤 崇（いとう たかし）、山本俊幸

（福島県立医科大学医学部皮膚科学講座）

12. 「組織透明化技術を用いた皮膚内部の3次元構造解析」

東ヶ崎健（とうがさき たけし）、近藤慎也、西澤志乃、石渡潮路、鈴木民恵、
松熊祥子

（株式会社ファンケル総合研究所ビューティサイエンス研究センター）

13. 「顆粒球吸着療法により良好なコントロールをしえた高齢膿疱性乾癬の一例」

岳崎彩香（おかざき あやか）、夏見亜希、立石千晴、鶴田大輔

（大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学）

14. 「高齢女性における陰部パジェット病の治療マネージメント」

滝吉典子（たきよし のりこ）、金子高英、中野 創、澤村大輔

（弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座）

12:00-12:20 ランチョン昼食

〈小会議室A〉

12:20-13:20 ランチョンセミナー

共催：ポーラファルマ株式会社
〈大会議室〉

座長：尹 浩信（熊本大学大学院生命科学研究部 皮膚病態治療再建学分野）

「水疱性類天疱瘡の臨床と免疫学的特徴」

北海道大学大学院医学研究院・皮膚科学教室 准教授 西江 渉（にしえ わたる）

座長：森田 明理（名古屋市立大学大学院医学研究科 加齢・環境皮膚科学）

「高齢者の皮膚感染症 一爪白癬、带状疱疹」

愛知医科大学皮膚科学講座 教授 渡辺大輔（わたなべ だいすけ）

13:20-13:30 閉会式

〈大会議室〉

閉会の辞

第15回 加齢皮膚医学研究会

会頭 尹 浩信（熊本大学大学院生命科学研究部皮膚病態治療再建学分野）

賞 卜 一 □



平成30年度 第12回ロート賞受賞者

1. 『生体イメージングを用いた老人性乾皮症における かゆみのメカニズム解明』

大塚 篤司（おおつか あつし）

（京都大学医学部外胚葉性疾患創薬医学講座（皮膚科兼任） 特定准教授）

2. 『皮膚への遺伝子導入系の開発と、老化抑制遺伝子導入による 皮膚若返りの試み』

三浦 浩美（みうら ひろみ）

（東海大学医学部基盤診療学系再生医療科学 特定研究員）

3. 『加齢による皮膚悪性腫瘍HPV感染プロファイル変化の研究』

清水 晶（しみず あきら）

（群馬大学医学部付属病院 講師）

□ー卜賞受賞記念講演



性ホルモンが乾癬病態形成に及ぼす役割の解明

本田 哲也（ほんだ てつや）
京都大学皮膚科

代表的な炎症性皮膚疾患である乾癬は、閉経前の女性では男性に比べ重症度が低い
が、閉経後にはその差が消失することが疫学的に知られている。また、妊娠により皮疹
が軽快する症例も報告されている。このように、乾癬病態形成と性ホルモン、特にエス
トロゲンとの関連は臨床的に示唆されている。しかし、その関与の程度や分子メカニズ
ムの詳細は未だ不明な点が多い。

申請者は、エストロゲンが乾癬病態形成に及ぼす作用メカニズムについて、イミキモ
ド誘発マウス乾癬モデルを用いて検討した。卵巣摘出術を行い内在性の女性ホルモンの
影響を除いたマウスでは、コントロール群にくらべ乾癬様皮膚炎症の程度が優位に増悪
した。逆に、それら卵巣摘出術施行後のマウスにエストロゲンを持続投与すると、その
皮膚炎症の増悪は軽減した。すなわち、エストロゲンが乾癬様皮膚炎症に抑制的作用を
発揮することが示された。エストロゲン投与群の皮膚炎症部位では、IL-23, IL-17 など
の種々の乾癬関連サイトカイン・ケモカインの発現が低下していたが、特に好中球遊走
ケモカインであるCXCL2の発現が有意に低下し、また好中球の皮膚浸潤が有意に低下
していた。

以上の結果から、エストロゲンは好中球の皮膚浸潤を制御することで、乾癬病態形成
に抑制的作用を示している可能性が示唆された。

略歴

2000年	京都大学医学部卒
2000年-2001年	京都大学医学部附属病院皮膚科・研修医（宮地良樹教授）
2001年-2002年	島根県立中央病院皮膚科・医員
2002年-2003年	大阪赤十字病院皮膚科・医員
2003年-2007年	京都大学大学院医学研究科・大学院生（成宮周教授）
2007年-2010年	京都大学医学部附属病院皮膚科・助教
2010年-2012年	米国国立衛生研究所・visiting fellow (Ronald N Germain博士)
2012年-2015年11月	京都大学医学研究科・AKプロジェクト・特任准教授
2015年12月-現在	京都大学医学部附属病院皮膚科・講師（椋島健治教授）

専門分野：乾癬、アトピー性皮膚炎、接触皮膚炎



紫外線皮膚障害と発癌に対する新規治療ターゲットとしてのミトコンドリア分裂因子DRP1の機能解析

柳 輝希 (やなぎ てるき)

北海道大学大学院医学研究科皮膚科学分野

ミトコンドリアは、さまざまな細胞応答において中心的な機能を発揮し、また、融合と分裂を繰り返し形態を変化させている。近年、ミトコンドリアの融合と分裂に機能するGTP加水分解酵素群が同定され、融合にはMitofusin(Mfn)1、Mfn2、OPA1、分裂にはDRP1 (Dynamin Related Protein 1) が関与する。DRP1は、悪性黒色腫などの悪性腫瘍の細胞分裂維持に必須であることが報告されているが、紫外線発癌における分子機能は不明である。申請者は、皮膚老化・紫外線皮膚障害・皮膚有棘細胞癌におけるDRP1の機能を解析するために、臨床検体および培養細胞を用いた実験を実施した。その結果、DRP1は皮膚有棘細胞癌腫瘍部で高発現していること、DRP1ノックダウンは皮膚有棘細胞癌の増殖を抑制することが判明した。ミトコンドリア分裂関連分子DRP1は皮膚有棘細胞癌における新しいバイオマーカーになる可能性があり、また新規治療ターゲットになる可能性も示唆された。

略歴

2003年	3月	北海道大学医学部 卒業
2003年	5月	北海道大学医学部附属病院 研修医
2005年	4月	斗南病院皮膚科 医員
2006年	4月	北海道がんセンター皮膚科 レジデント
2009年	4月	北海道大学病院皮膚科 医員
2010年	3月	北海道大学大学院医学研究科 博士課程 修了
2010年	4月	札幌社会保険総合病院皮膚科 非常勤医師
2010年	6月	北海道大学大学院医学研究科皮膚科学分野 学術研究員
2011年	4月	日本学術振興会 特別研究員PD (北海道大学腫瘍病理学分野)
2012年	10月	北海道大学大学院腫瘍病理学分野 博士研究員
2013年	4月	日本学術振興会 海外特別研究員 (サンフォード・バーナム研究所)
2015年	4月	北海道大学病院皮膚科 医員
2016年	4月	北海道大学大学院医学研究科 特任助教
2018年	7月	現在に至る



急性期褥瘡に対する新たな治療法の開発

上原 顕仁（うえはら あきひと）

群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学

これまでに、皮膚潰瘍が生じた後の「慢性期褥瘡」に対する多くの治療法が開発されてきたが、皮膚潰瘍が生じる前の「急性期褥瘡」に対する治療法は注目されておらず、ガイドラインでも、除圧と創部の保護だけでありエビデンスレベルの高い治療法がない。せっかく皮膚潰瘍に至る前の褥瘡を早期に発見することができても、残念ながら、潰瘍になるまで観察していく以外に方法がない。そこで、今回、我々は急性期褥瘡マウスモデル（皮膚虚血再還流モデル）を用いて間葉系幹細胞（Mesenchymal stem cell: MSC）の皮下注射による急性期褥瘡（皮膚虚血再還流障害）に対する治療効果とその機序について検討した。

急性期褥瘡部位にMSCを皮下注射すると、その後の潰瘍形成が有意に抑制された。また、褥瘡部位の血管障害、低酸素領域、酸化ストレスによるアポトーシスがMSCの皮下注射によって抑制された。また、酸化ストレス可視化マウスを用いて褥瘡部位に生じた酸化ストレスがMSC皮下注射によって抑制されることも確認した。さらに、褥瘡部の皮膚では小胞体（Endoplasmic Reticulum: ER）ストレスが増加し、MSCの皮下注射により抑制されることも見出した。小胞体ストレス因子（GRP78/BiP, C/EBP homologous protein (CHOP))が褥瘡部位で増加し、MSC局注によって抑制された。

本研究の結果より、MSCの皮下注射によって、急性期褥瘡部位の血管障害が減少し、低酸素による酸化ストレスやERストレスも改善されることで、皮膚潰瘍の形成が抑制される可能性が示唆された。これらの研究成果を臨床応用することで、褥瘡の痛みや身体的負担も軽減でき、患者のQOL向上につながる。さらに医療費や人件費、労働量の削減も期待できる。

略歴

- 2007年 4月 群馬大学医学部附属病院初期研修医
- 2009年 4月 群馬大学医学部附属病院皮膚科医員
- 2014年 4月 桐生厚生総合病院皮膚科医長
- 2015年 4月 群馬大学医学部附属病院皮膚科医員
- 2016年 4月 群馬大学医学部附属病院臨床試験部臨床助教（皮膚科兼任）
- 2018年 4月 群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学助教専門分野：乾癬、アトピー性皮膚炎、接触皮膚炎



ヒト皮膚におけるT細胞多様性の 加齢に伴う変化

吉岡 華子（よしおか はなこ）

筑波大学医学医療系皮膚科

皮膚T細胞の構築に関して、新生児皮膚にT細胞がほとんど存在せず、皮膚T細胞が皮膚への抗原曝露を繰り返す過程で循環から動員され構築されていくことが想定されている。組織は血中とは異なる固有のT細胞叢を有することがマウスモデルで示されており、皮膚T細胞の加齢変化を単純に血中T細胞の変化を当てはめて推測できないことは容易に推察され、今回我々はヒト皮膚T細胞の変化をヒト血中T細胞と同一人物間で直接比較検討することとした。具体的には、皮膚・血中T細胞の加齢による数的変化、多様性変化を検討するため、20-49歳の若年層、50-79歳の中年層、80歳以上の高年層の3群の年齢層において皮膚、血液検体よりT細胞受容体レパトア解析を行った。T細胞受容体レパトア解析は、検体に含まれるT細胞受容体の可変部CDR3領域の塩基配列を全て解読する手法であり、検体中のT細胞の数、多様性を網羅的に検討できる。血中のT細胞受容体レパトアは、若年層と比較して中年層・高年層において多様性が下がる傾向がみられたが、皮膚T細胞受容体レパトアは3群間で傾向がみられず、皮膚T細胞の多様性が加齢で低下しにくいことがわかった。また、皮膚T細胞においては、高年層で同年齢層間におけるレパトアの共通クローンが増加することが判明した。

略歴

2009年3月 北海道大学医学部医学科卒業
 2009年4月 北海道大学病院 初期研修医
 2011年4月 北海道大学病院 後期研修医
 2012年4月 市立札幌病院 後期研修医
 2013年4月 大阪大学医学部附属病院 助教
 2014年4月 箕面市立病院 医員
 2016年4月 筑波大学附属病院 クリニカルフェロー
 2017年4月 筑波大学大学院人間総合科学研究科 博士課程 入学

MEMO

加齡皮膚医学講座



年齢からみた膠原病

藤本 学 (ふじもと まなぶ)

筑波大学医学医療系皮膚科学教授

略歴

1992年 3月 東京大学医学部医学科卒業
1992年 6月 東京大学医学部附属病院皮膚科 研修医
1993年 9月 東京警察病院皮膚科 レジデント
1995年 12月 佼成病院皮膚科 医師
1996年 12月 東京大学医学部附属病院皮膚科 助手
1997年 6月 米国Duke大学メディカルセンター免疫学教室 研究員
2000年 10月 国立国際医療センター研究所 細胞修飾生体反応研究室 室長
2004年 10月 東京大学医学部附属病院皮膚科 特任講師
2005年 3月 金沢大学大学院医学系研究科皮膚科学 助教授
2007年 4月 同 准教授（名称変更）
2013年 11月 筑波大学医学医療系皮膚科学 教授
現在に至る

専門領域

膠原病（強皮症、皮膚筋炎）、自己免疫・自己抗体、B細胞のバイオロジー

主な所属学会

日本皮膚科学会（東部支部副支部長）、日本研究皮膚科学会（理事）、日本乾癬学会（理事）、
皮膚かたち研究学会（理事）、日本臨床免疫学会（評議員）

抄録

膠原病は皮膚病変をはじめとする様々な症状を呈する全身性自己免疫疾患である。膠原病は若い女性に好発するというイメージがあるかもしれないが、実際にはその発症は小児から老人まで多岐にわたる。また、発症年齢によってその臨床像にも相違があり、治療にあたってはその年齢を考慮する必要がある。さらに、高齢者の一部では、悪性腫瘍を背景として傍腫瘍症候群として発症すると推測される一群もあり、合併症が経過や予後に大きな影響を及ぼす場合もある。本講演では、演者の専門である強皮症、皮膚筋炎とその類縁疾患を中心に、年齢からみた臨床的特徴とマネジメントにつき考えてみたい。



糖尿病皮膚における accelerated aging

末木 博彦 (すえき ひろひこ)

昭和大学医学部皮膚科学講座

略歴

1980年 3月 昭和大学医学部卒業
4月 同 大学皮膚科入局
1982年 6月 日赤医療センター皮膚科出張
1983年 6月 昭和大学医学部皮膚科 助手
1988年 6月 同 講師
1990年 7月～1993年 3月 米国ペンシルバニア大学皮膚科留学
(George F. Murphy教授・Albert M. Kligman教授に師事)
1993年 4月 昭和大学医学部皮膚科 講師 帰任
1995年 4月 昭和大学医学部皮膚科 助教授
2004年11月 昭和大学医学部皮膚科 教授 (員外)
2006年 6月 昭和大学藤が丘病院皮膚科 医長 教授 (員外)
2009年 4月 昭和大学藤が丘病院皮膚科 教授
2012年 4月 昭和大学医学部皮膚科学講座 主任教授

所属学会

日本皮膚科学会 (代議員、東京支部学術委員会委員)
日本研究皮膚科学会 (評議員)
日本乾癬学会 (評議員)
日本化粧品科学会 (理事・学会誌編集委員会副委員長)
日本美容皮膚科学会 (評議員)
日本皮膚悪性腫瘍学会 (評議員)
日本臨床皮膚科医会
日本皮膚アレルギー接触皮膚炎学会 (評議員)
水疱症研究会 (世話人)
東京サルコイドーシス肉芽腫性疾患研究会 (世話人)

その他の役職

2005年 4月より 独立行政法人医薬品医療機器総合機構 皮膚科専門委員
2016年 9月より 日本医師会健康食品安全対策委員会委員

専門分野

重症薬疹の診断と治療

糖尿病の皮膚病変

免疫担当細胞の病理学的研究

乾癬ほか炎症性角化症

アミロイドーシス

抄録

糖尿病が皮膚に及ぼす病態は、その多くが生体蛋白や核酸の非酵素的糖化（グリケーション）による機能性蛋白の劣化によって説明することが可能である。

糖尿病がバリア機能など角層機能に及ぼす影響についての報告は少ない。我々は糖尿病患者では同年齢の健常者に比し、表皮ターンオーバーが遅延していることを報告した。糖尿病ヘアレスマウスモデルでも表皮ターンオーバーの遅延があり、角層水分量ならびにトリグリセリドの減少がみられる反面、セラミド、コレステロール、脂肪酸は増加していた。バリア機能は保たれているものの、角質水分量の低下と発汗低下が相俟って乾皮症を生ずる。これらは高齢者の皮膚の特徴と共通しており糖尿病皮膚は老化が亢進した状態とも解釈される。

非酵素的糖化反応は緩徐に不可逆的な脱水、縮合反応を繰り返し、特有の蛍光を持つ黄褐色の物質である advanced glycation end products (AGEs) を形成する。慢性的な高血糖が持続する糖尿病では循環血液中や各臓器の組織において老化蛋白とされる AGEs の形成が促進され、不可逆的に蓄積される。AGEs は細胞表面受容体である receptor for advanced glycation end products (RAGE) によって認識され、臓器障害を招く。これらの反応は総合的に「糖化ストレス」と総称され、酸化ストレスと相加的あるいは相乗的に老化危険因子として働く。皮膚においても非蛍光性、非架橋性 AGEs である carboxymethyl lysine (CML) は日光露光部の弾性線維 elastin に一致して沈着しており、actinic elastosis においては紫外線による酸化ストレスが CML 形成を促進することが報告されている。糖尿病に伴う皮膚疾患では acquired reactive perforating collagenosis の発症に AGE 化された collagen の関与が指摘されている。

近年皮膚に励起波長を照射し発せられる蛍光波長を測定して、蛍光強度の積分値を AGEs 値として測定できる機器が開発され、販売されている。糖尿病の有無を規定しない住民を対象とした調査では、皮膚 AGEs 値と実年齢、さらには皮膚 AGEs 値とシワやたるみなどの画像解析ソフトから年齢を推定した「見た目年齢」はいずれも統計学的に有意な相関を示すことが報告されている。

MEMO

イブニングセミナー

共催：マルホ株式会社



発汗機能に着目した保湿剤による 乾燥性皮膚疾患治療

青山 裕美（あおやま ゆみ）

川崎医科大学皮膚科学 教授

略歴

平成 元年 3月 岐阜大学医学部卒業
 平成 元年 4月 岐阜大学医学部皮膚科入局
 平成 6年 9月 京都薬科大学生命薬学研究所 分子生体制御部門 研究生として研究に従事
 平成 8年10月 岐阜大学皮膚科助手
 平成12年 4月 留学 ポスドク
 Cutaneous Research Center, Massachusetts General Hospital, Harvard medical school,
 Paolo Dotto教授研究室（1年）表皮細胞の分化に関する研究
 Diabetes Research Lab, Department of Molecular Biology,
 Massachusetts General Hospital, Harvard medical school,
 Joseph Avruch（ジョセフアバラック）教授研究室（3年）アポトーシスの研究
 平成16年 4月 岐阜大学大学院医学研究科助手
 平成16年12月 岐阜大学医学部附属病院講師
 平成21年 7月 岡山労災病院皮膚科 医長
 平成22年 4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚科学 講師
 平成23年 4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚科学准教授
 平成27年 4月 川崎医科大学 皮膚科（定員外）教授 川崎医科大学総合医療センター 皮膚科部長併任
 平成30年 4月 川崎医科大学 皮膚科教授
 現在に至る。

抄録

アトピー性皮膚炎（AD）患者では角層水分量が低く、バリア機能が低下することで感作を誘導し、これらは皮膚炎の中心的な病態として考えられるようになった。AD患者は発汗機能に異常があり、発汗量が健康な人に比べ少ないことが角層水分量を減少させ、バリア機能が低下すると考えられる。我々は、65才以上の高齢者の痒疹患者（n=3）を対象に、前腕の健常部位の基礎発汗と温熱発汗を検討したところ、50才以下の痒疹患者（n=8）に比べ著しく低下していることが明らかになった。これらの結果は、加齢による発汗低下も皮膚炎が遷延化する要因になりうることを示唆している。また、痒疹やアミロイド苔癬の皮疹部位における基礎発汗と温熱発汗を検討したところ、皮疹部位に一致した発汗障害を観察した。

そこで我々は持続的な角層水分量の維持のためには「基礎発汗機能の回復」が重要と着想し、基礎発汗を誘導する外用剤を検討し、発汗障害のある皮膚疾患の治療に使用した治療効果を検討したので結果を供覧する。発汗障害をともなう皮膚疾患の外用治療に基礎発汗誘導という新基軸を意識することでより適切な治療効果が期待できる可能性があると考えている。



ヘルペス感染症の病態と治療の最前線

川村 龍吉 (かわむら たつよし)

山梨大学大学院総合研究部医学域臨床医学系皮膚科 教授

略歴

平成 2年 3月 山梨医科大学医学部医学科卒業
 平成 2年 6月 山梨医科大学医学部皮膚科学講座 研修医
 平成 4年 6月 静岡県共立蒲原総合病院 皮膚科 医員
 平成 5年 6月 山梨医科大学医学部 皮膚科 医員
 平成 6年 1月 山梨医科大学医学部 皮膚科 助手
 平成 7年 7月 順天堂大学医学部 免疫学講座 研究員
 平成10年 7月 米国国立衛生研究所／国立癌研究所 皮膚科 研究員
 平成14年 5月 山梨医科大学医学部 皮膚科 講師（病棟医長）
 平成14年10月 山梨大学医学部 皮膚科 講師
 平成18年 9月 山梨大学医学部 皮膚科 講師（外来医長）
 平成26年10月 山梨大学大学院総合研究部医学域臨床医学系 皮膚科 講師
 平成26年12月 山梨大学大学院総合研究部医学域臨床医学系 皮膚科 准教授
 平成29年 1月 山梨大学大学院総合研究部医学域臨床医学系 皮膚科 教授

学位・免許

平成 2年 6月 医師免許証（医籍登録番号 第438229号）
 平成10年11月 医学博士学位（山梨医科大学乙 第154号）
 平成16年10月 日本皮膚科学会専門医（認定番号 第06741号）
 平成21年 4月 日本がん治療認定医（認定番号 第08100703号）
 平成25年10月 臨床研修指導医
 平成26年11月 難病指定医（指定医番号 19S0000217）

所属学会

平成 3年 4月 日本皮膚科学会（Journal of Dermatology: section editor）
 平成 7年10月 日本免疫学会
 平成 9年 4月 日本研究皮膚科学会（評議員）
 平成10年 4月 Society for Investigative Dermatology
 平成22年 4月 日本皮膚悪性腫瘍学会
 平成23年 4月 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会（評議員）
 平成24年 4月 Frontiers in Microbiology: review editor
 平成27年 4月 Journal of Investigative Dermatology: associate editor
 平成28年 1月 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員（審査委員）

賞罰

平成14年 2月 NIH Fellows Award for Research Excellence (FARE 2002)
平成21年12月 第10回 ガルデルマ賞
平成22年 4月 第2回 ロート皮膚医学研究賞
平成23年 5月 第16回 山梨科学アカデミー奨励賞
平成24年 6月 平成24年度 日本皮膚科学会雑誌論文賞
平成25年 6月 平成25年度 日本皮膚科学会皆見省吾記念賞
平成26年12月 平成26年度 日本研究皮膚科学会 (JSID) 賞

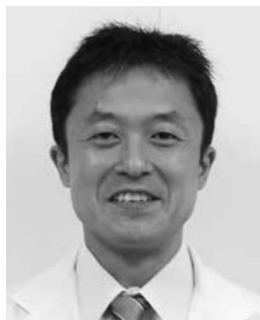
抄録

带状疱疹における宿主免疫機構は非常に複雑であるが、自然免疫、内因性免疫、獲得免疫の三つの免疫システムによって水痘・带状疱疹ウイルス (VZV) の複製・増殖が制御される。自然免疫はウイルス認識と初期応答に重要であり、獲得免疫ではとりわけVZV特異的CTLが中心的な役割を果たし、内因性免疫は種々の感染細胞においてウイルスの複製を抑制する。一方、治療においては、世界初の1日1回内服のアメナメビルが登場したが、その内服は朝、昼、夜のいつがベストなのであろうか？昨年ノーベル生理学・医学賞を受賞した「体内時計を制御する分子メカニズム」とVZV複製の概日リズムの関連から、最も有効な内服のタイミングについて考えてみたい。

MEMO

ランチョンセミナー

共催：ポーラファルマ株式会社



水疱性類天疱瘡の臨床と免疫学的特徴

西江 渉（にしえ わたる）

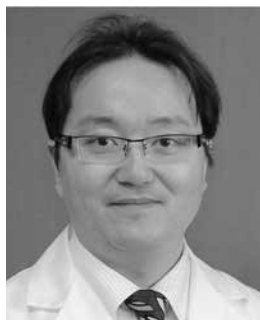
北海道大学大学院医学研究院・皮膚科学教室 准教授

略歴

1995年 3月 弘前大学医学部医学課程卒業
1995年 4月 勤医協中央病院内科研修医
1998年 4月 勤医協中央病院皮膚科医
2002年 6月 北海道大学病院皮膚科医員
2007年 4月 北海道大学医学部皮膚科、助教
2008年 7月-2010年6月 フライブルグ大学医学部皮膚科、博士研究員（ドイツ）
2010年 7月 北海道大学医学部皮膚科、助教
2010年10月 北海道大学病院皮膚科、講師
2015年 9月 北海道大学大学院医学研究科皮膚科、准教授
2017年 4月 北海道大学大学院医学研究院皮膚科学、准教授（所属機関の名称変更）
2017年 4月-12月 フライブルグ大学医学部皮膚科、客員研究員（兼任）
現在に至る

抄録

水疱性類天疱瘡（Bullous pemphigoid, BP）は、本邦における自己免疫性水疱症のなかで最も頻度が高い疾患である。本症は、他の自己免疫疾患とは異なり高齢者に好発する点が特徴であり、近年の高齢化社会を背景に患者数が増加している。従って、日常診療で本症に遭遇する機会が増えたと感じる臨床医も多いと推測される。典型的なBPでは、強い掻痒を伴い、多数の緊満性水疱と浮腫性紅斑が全身の皮膚に多発し、病理組織学的には、多数の好酸球浸潤を伴う表皮下水疱を認める。しかしBPは多彩臨床所見を呈する疾患であり、汗疱に類似する小水疱が手足に生じる汗疱型、結節性痒疹を伴う結節性類天疱瘡、妊娠中に生じる妊娠性疱疹など、様々な病型（亜型）が存在する。浮腫性紅斑や好酸球浸潤が乏しい症例も稀でない。近年は、中枢神経疾患や特定の薬剤摂取が本症発症のリスク因子であることが判明し、特に糖尿病治療薬内服中に発症した症例が多数報告されている。糖尿病治療薬内服に関連し発症した症例では、特徴的な臨床・免疫・遺伝学的所見を有することも明らかになった。本講演では、BPの多様な臨床病型と診断のポイントについて、近年の知見を交え紹介したい。



高齢者の皮膚感染症 ―爪白癬，帯状疱疹―

渡辺 大輔（わたなべ だいすけ）

愛知医科大学皮膚科 教授

略歴

平成 5年 名古屋大学医学部卒業
平成 5年～ 6年 厚生連加茂病院 研修医
平成 6年～ 7年 名古屋大学医学部附属病院 研修医
平成 7年～11年 名古屋大学大学院医学研究科
医学博士学位取得
平成11年～13年 名古屋大学医学部助手（病態制御研究部門 ウイルス感染）
平成14年～16年 米国留学（Harvard Medical School ポスドク）
平成16年～ 愛知医科大学皮膚科助教授
平成19年～ 愛知医科大学皮膚科准教授
平成22年～ 愛知医科大学皮膚科 教授

専門分野

ヘルペスウイルス感染症，悪性腫瘍（腫瘍溶解性ウイルス療法）など

学会活動

日本皮膚科学会 代議員
日本ウイルス学会，日本性感感染症学会，日本研究皮膚科学会，日本皮膚悪性腫瘍学会，
日本乾癬学会，日本皮膚科心身医学会，日本皮膚免疫アレルギー学会，
日本美容皮膚科学会 日本光皮膚科学会 評議員 評議員
ヘルペスウイルス研究会 世話人 加齢皮膚医学研究会 幹事
日本遺伝子治療学会，日本光線力学学会，
日本臨床皮膚科医会 日本感染症学会 日本化学療法学会 会員
雑誌「ウイルス」編集委員

賞罰

平成15年 Fellow Travel Grant Award (AIDS Vaccine 2003 NYC, NY USA)
平成17年 29th International Herpesvirus Workshop Grant Award
(29th International Herpesvirus Workshop, Reno, Nevada USA)
平成23年 第22回 世界皮膚科会議 ポスター賞（銀賞）（ソウル）

抄録

帯状疱疹は水痘・帯状疱疹ウイルス (VZV) の再活性化により発症するが、高齢者では発症率が高くなることに加え、また治癒後も帯状疱疹後神経痛 (PHN) の発症率が高いことが問題となる。帯状疱疹が高齢者に多い理由としては、VZV特異的細胞性免疫の生理的な低下が挙げられるが、ワクチン接種によりVZV特異的免疫を賦活化することで発症率を低下させることができる。水痘生ワクチンは小児の水痘予防に使用されてきたが、わが国でも2016年から50歳以上の帯状疱疹予防に使用できるようになった。また免疫能低下患者にも使用できるサブユニットワクチンが最近わが国でも認可され、近い将来使用できるようになる予定である。

一般演題

1. 「群馬大学皮膚科における早老症6例のまとめ」

上原顕仁（うえはら あきひと）、茂木精一郎、関口明子、石川治
（群馬大学医学系研究科皮膚科学）

早老症6例（Werner 症候群5例、Atypical Werner 症候群1例）の臨床的特徴について検討した。Werner 症候群（男2例、女3例）の初発症状は白内障2例、脂肪肝2例 白髪1例。平均28歳で発症。診断は平均41歳。早老性毛髪変化、白内障、皮膚の委縮・硬化、軟部組織の石灰化、鳥様顔貌、音声の異常は全例にみられた。3例で難治性皮膚潰瘍を伴った。臨床症状について Atypical Werner 症候群と比較した。

2. 「Epitope spreading現象によって抗BP180 NC16a抗体が陽転化した dipeptidyl peptidase-IV 阻害薬関連水疱性類天疱瘡の3例」

眞井洋輔¹（まい ようすけ）、西江渉¹、泉健太郎¹、葭本倫大¹、森田裕介¹、
渡邊美佳¹、豊永愛恋¹、氏家英之¹、岩田浩明¹、藤田靖幸¹、乃村俊史¹、
松村和子²、清水聡子³、清水宏¹

（¹北海道大学大学院医学研究科皮膚科、²独立行政法人地域医療機能推進機構札幌北辰病院皮膚科、³市立札幌病院皮膚科）

近年、dipeptidyl peptidase-IV 阻害薬内服中に発症した水疱性類天疱瘡（DPP4i-BP）が相次いで報告されている。DPP4i-BP は水疱周囲以外の紅斑が少ない臨床像を呈し、抗BP180 NC16a 抗体は陰性か低力価となる症例が多い。今回、経過中 epitope spreading 現象によって抗BP180 NC16a 抗体が陽転化した DPP4i-BP を3例経験したので報告する。

3. 「アロネーシス (痒覚過敏) の分子メカニズムの解明と治療法の開発」

富永光俊¹ (とみなが みつとし)、本田耕太郎¹、高森建二^{1・2}

(¹ 順天堂大学大学院医学研究科環境医学研究所、² 順天堂大学医学部附属浦安病院皮膚科)

乾皮症及びアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患は、「通常ならば、かゆみを生じない軽微な機械刺激によってかゆみが生じる過敏現象 (アロネーシス)」を発症する。これまでアロネーシスの発症に関わる分子は不明であったが、最近、我々は硫酸化修飾を受けたコレシストキニン 8 (CCK8S) をマウスの髄腔内に投与すると、アロネーシスが誘発されることを見出した。本発表では、アロネーシスの発症における CCK システムの役割について述べる。

4. 「ヒト皮膚線維芽細胞におけるコラーゲン受容体・ Discoidin domain receptor 2 と細胞外マトリックス形成」

蔀泰幸 (しとみ やすゆき)、石渡潮路、桜井哲人、松熊祥子

(株式会社ファンケル総合研究所)

コラーゲン受容体・Discoidin domain receptor 2 (DDR2) は、コラーゲンの分解と再生に関与していることが知られているが、コラーゲン以外の細胞外マトリックスタンパク質との関係や皮膚老化との関係についての報告はない。我々は、DDR2 がコラーゲン線維の形成だけでなく、EMILIN2 (Elastin microfibril interface located protein 2) やエラスチンなどの細胞外マトリックスの線維形成にも寄与している新たな知見を見出した。また細胞老化により DDR2 が減少し、これがコラーゲン線維減少の一因と推測された。

5. 「T細胞の抗原反応性応答の加齢変化」

吉岡華子（よしおか はなこ）、渡辺玲、藤澤康弘、石塚洋典、中村貴之、
沖山奈緒子、藤本学
（筑波大学医学医療系皮膚科）

20-49 歳、50-79 歳、80 歳 - の 3 つの年齢層の末梢血単核球を CFSE 染色の上、加熱処理した黄色ブドウ球菌、カンジダと共培養し、T 細胞増殖とサイトカイン産生を flow cytometry で検討した。高齢者では抗原反応性増殖は見られるものの、増殖 CD4 T 細胞からの IL-17A 産生が低下していた。一方、皮膚 T 細胞では、加齢によるサイトカイン産生能の低下が軽度であった。高齢者では血中と比較して皮膚における抗原応答 T 細胞の機能低下が軽微と推察される。

一般演題② 6～10

座長：原田 研

6. 「疣状乾癬にアプレミラストが著効した 1 例」

岡崎沙麗（おかざき さり）、大澤梨佐、中島英貴、佐野栄紀
（高知大学医学部皮膚科学講座）

67 歳男性。30 年以上前に前医で尋常性乾癬と診断され、15 年前に当院を初回受診した。体幹の紅色丘疹と両下腿の角質増殖が著明な乳頭状の結節があり、下腿の皮膚生検では著明な角質増殖と表皮の肥厚を認め、疣状乾癬と診断した。右下腿の疣状結節はアブレーションを施行しエトレチナート、シクロスポリンの内服を行うも改善は認めなかった。本人の都合により生物学的製剤導入は困難であったため、2017 年 9 月からアプレミラストを投与した。体幹の紅色丘疹は消退し、両下腿の疣状結節も縮小した。アプレミラストの副作用と考えらる軟便を認めるが、その他の有害事象はなく治療を継続している。

7. 「メトトレキサートの過剰摂取により生じた多発口腔潰瘍」

森直哉（もり なおや）、牧野輝彦、原 寛、虎井僚太郎、清水忠道
（富山大学大学院医学薬学研究部皮膚科学）

83歳女。13年前から関節リウマチに対してメトトレキサート（MTX）内服中。6日前から口腔内多発潰瘍と疼痛を認め受診。口腔粘膜生検で粘膜上皮の壊死を認めた。DIF陰性。血液検査で汎血球減少あり。血清抗Dsg1, 3抗体、抗BP180抗体は陰性。MTXの残薬を確認したところ過剰摂取していたことが判明。検査所見と合わせ多発口腔潰瘍はMTXの過剰摂取によるものと診断。高齢者人口の増加にともない自験例のような不適切な薬剤摂取による副作用の増加が懸念される。高齢者の服薬アドヒアランスを維持するための更なる工夫が必要である。

8. 「UVA曝露ヒト真皮線維芽細胞における ヒアルロン酸分泌低下を引き起こす分子生物学的メカニズム」

芋川玄爾（いもかわ げんじ）、寺澤周子、佐藤より子、庭野隆夫
（宇都宮大・バイオサイエンス教育研究センター）

我々はUVAのヒト真皮線維芽細胞（HDF）でのHA分泌および関連酵素発現への影響さらにその細胞内シグナルメカニズムを解析した。UVA（5-10 J/cm²）は有意なHA分泌量低下をHAS2遺伝子蛋白発現抑制とHA分解関連蛋白HYBID（HYaluronan Binding protein Involved in hyaluronan Depolymerization）遺伝子蛋白発現増強により誘導することが判明した。細胞内シグナル経路解析の結果、UVA（10J/cm²）でp38/ATF-2/MAPK-APK2/c-Jun/CREBリン酸化とc-Fos蛋白は増加しMEK/ERK/STAT3リン酸化は抑制された。またcFosではなくATF-2 siRNAがUVA誘導HYBID蛋白発現の増強を抑制した。UVA無照射でMEKとSTAT3両阻害剤によりHAS2遺伝子発現の有意な抑制がUVA照射下と同等レベルで起きることを確認した。以上よりUVA曝露HDFではUVA活性化シグナルp38/ATF-2系によるHYBID遺伝子発現増強とUVA不活性化シグナルERKまたはSTAT3系によるHAS2遺伝子発現低下によりHA分解促進と産生抑制を介しHA分泌の低下が生じる可能性が示唆された。

9. 「3重複癌を合併した抗TIF1- γ 抗体陽性皮膚筋炎の1例」

浅野伸幸（あさの のぶゆき）、下村裕

（山口大学大学院医学系研究科皮膚科学講座）

69歳、男。2017年9月頃より、顔面、背部、四肢に紅斑が出現し、10月26日当科受診。軽度の筋力低下あり。血液検査にてELISA法により抗TIF1- γ 抗体が陽性。造影CTにて右肺上葉の結節影、両側鎖骨上窩・縦隔の腫大リンパ節を認めた。腫大リンパ節の生検にて肺小細胞癌と診断。上部消化管内視鏡検査にて胃角前壁にBorrmann II型の腫瘍性病変あり、生検にて腺癌と診断。下部消化管内視鏡検査にて、S状結腸に陥凹をとまなう腫瘍性病変あり、生検にて腺癌と診断。

10. 「角層DJ-1を用いた体内の酸化ストレス評価」

高橋理子¹（たかはし みちこ）、鈴木民恵¹、石渡潮路¹、村上礼一²、
秋田美季²、宮川泰子²、三上正治²、八代壇²、斎藤芳郎³、野口範子³、
松熊祥子¹

（¹株式会社ファンケル 総合研究所、²医療法人三良会 青い海公園クリニック、³同志社大学 生命医科学部）

DJ-1は酸化ストレス防御に関わるタンパク質で、酸化ストレス下で自身が酸化され酸化DJ-1を生じることで生体の酸化障害抑制に働く。初期のパーキンソン病患者の赤血球中に高濃度の酸化DJ-1が検出されることや、皮膚においてもDJ-1量が高いほど紫外線障害抑制が見られることから、今回、酸化ストレスが亢進していると考えられる人工透析患者を対象としてこれらを測定した。その結果、角層および血球においてDJ-1に対する酸化型DJ-1の比が健常に比べて低いことが示され、体内の酸化ストレス指標となり得る可能性が見出された。

11. 「高齢女性に生じた痛風結節の1例」

伊藤崇（いとう たかし）、山本俊幸

（福島県立医科大学医学部皮膚科学講座）

92歳、女性。発症時期は不明だが、左母趾外側に硬く白色調の皮下結節を生じていた。結節部が機械刺激のため自壊し、潰瘍になったため当科関連病院皮膚科を初診した。左母趾外側に紅色の肉芽に覆われた皮膚潰瘍と残存する白色沈着物を認め、また両手指関節部にも黄白色調の皮下結節を多数認めた。左母趾からの皮膚生検では、真皮内に弱好塩基性の無定形物質が沈着し、内部には針状の空隙が認められた。

12. 「組織透明化技術を用いた皮膚内部の3次元構造解析」

東ヶ崎健（とうがさき たけし）、近藤慎也、西澤志乃、石渡潮路、鈴木民恵、
松熊祥子

（株式会社ファンケル総合研究所ビューティサイエンス研究センター）

組織透明化技術をヒトの Ex vivo 皮膚に適応し、皮膚内部の3次元観察による構造解析を試みた。膠原繊維を支持する弾性線維は、網目状に絡んで存在し、真皮浅層においては表皮に垂直に存在することが知られているが、老若各3名の腹部皮膚を透明化し、Elastin、Fibrillin-1のイメージング解析を行ったところ、老齢ではその直線性が低下し、湾曲化していることが認められ、本手法によって皮膚内部の構造的違いを捉えることが可能と考えられた。

13. 「顆粒球吸着療法により良好なコントロールをしえた高齢膿疱性乾癬の一例」

岳崎彩香（おかざき あやか）、夏見亜希、立石千晴、鶴田大輔
（大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学）

82 歳、男性。既往歴：汗管癌。57 歳時膿疱性乾癬発症。チガソン内服にて加療されていたが、経過中に薬剤熱を疑われ中止した。シクロスポリン内服に変更し治療を継続していたが、12 年経過時に急性膀胱炎を発症したため、外用療法のみに変更した。膿疱を伴う紅斑が再燃し、汗管癌の手術療法 4 年半後の経過であったため、顆粒球吸着療法を開始した。現在、顆粒球吸着療法を 3 年継続し、良好なコントロールを得ている。

14. 「高齢女性における陰部パジェット病の治療マネージメント」

滝吉典子（たきよし のりこ）、金子高英、中野創、澤村大輔
（弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座）

陰部パジェット病の標準的治療が外科療法であることは論を俟たないが、高齢者に多く合併症も少なくないため、その適応の判断には慎重を要する。とりわけ女性の場合、外性器の形状の複雑さから手術侵襲も高度である。過去 10 年間に当科で治療した陰部パジェット病の女性患者 24 例のうち、放射線療法を選択したのは 5 例で、全例 80 歳以上の後期高齢者であった。それらの症例の治療経過について報告するとともに、高齢女性における本疾患の治療マネージメントについて考察する。

謝 辞

本研究会の開催にあたり下記の皆さまよりご協賛いただきました。
ここに深甚なる感謝の意を表します。

第14回加齢皮膚医学研究会
会頭 澤村 大輔

科研製薬株式会社

協和発酵キリン株式会社

サノフィ株式会社

大鵬薬品工業株式会社

ノバルティスファーマ株式会社

ブリストル・マイヤーズスクイブ株式会社

マルホ株式会社

ヤンセンファーマ株式会社

株式会社ポーラファルマ

(五十音順)

maruho



創薬 処方箋医薬品*

尋常性乾癬治療剤

薬価基準収載

マーデュオックス®軟膏

Marduox® Ointment

：マキサルシトール／ベタメタゾン酪酸エステルプロピオン酸エステル配合 製剤

*注意—医師等の処方箋により使用すること

販売

maruho

〔資料請求先〕

マルホ株式会社
大阪市北区中津1-5-22

製造販売元



中外製薬株式会社
東京都中央区日本橋室町2-1-1

効能・効果、用法・用量、警告・禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。

(2016.6作成)



アレルギー性疾患治療剤

処方箋医薬品（注意—医師等の処方箋により使用すること）

薬価基準収載

B ビラノア錠 20mg
Bilanoa® tablet 20mg ビラスチン錠

〔効能・効果〕、〔用法・用量〕、〔禁忌を含む使用上の注意〕等については添付文書をご参照ください。

製造販売元
資料請求先
（医薬品情報課）



大鵬薬品工業株式会社
〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27
TEL.0120-20-4527 <https://www.taiho.co.jp/>

提携先



FAES FARMA スペイン

2017年11月作成



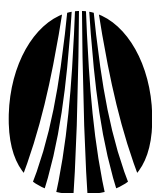
© Cultura RM Exclusive / Edwin Jimenez / Getty Images

Empowering Life

サノフィは、ヘルスジャーニー・パートナーとして、
私たちを必要とする人々に寄り添い支えます。

サノフィ株式会社

〒163-1488 東京都新宿区西新宿三丁目 20 番 2 号 東京オペラシティタワー www.sanofi.co.jp



爪白癬治療剤

エフィナコナゾール外用液

クレナフィン® 爪外用液10%

処方箋医薬品（注意—医師等の処方箋により使用すること）

CLENAFIN® Topical Solution 10%

薬価基準収載



製造販売元 [資料請求先]
科研製薬株式会社
東京都文京区本駒込2丁目28-8

●「効能・効果」「用法・用量」「禁忌を含む使用上の注意」等につきましては、添付文書をご参照ください。

2015年9月作成 CLN02CK

2015年12月作成



ヒト型抗ヒトIL-23p19モノクローナル抗体製剤

薬価基準収載



トレムフィア® 皮下注100mgシリンジ

新発売

Tremfya Subcutaneous Injection

グセルクマブ(遺伝子組換え)製剤

生物由来製品 劇薬 処方箋医薬品*

*注意 - 医師等の処方箋により使用すること

効能・効果、用法・用量、警告・禁忌を含む使用上の注意等につきましては添付文書をご参照ください。

製造販売元 (資料請求先)

ヤンセンファーマ株式会社

〒101-0065 東京都千代田区西神田3-5-2

www.janssen.com/japan

www.janssenpro.jp (医薬品情報)

販売元 (資料請求先)

大鵬薬品工業株式会社

〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27

<https://www.taiho.co.jp/>

0120-20-4527 (医薬品情報課)

©Janssen Pharmaceutical K.K. 2018

2018年5月作成

Novartis Pharma K.K.

新しい発想で医療に貢献します

ノバルティスのミッションは、より充実した、すこやかな毎日のために、新しい発想で医療に貢献することです。

イノベーションを推進することで、治療法が確立されていない疾患にも積極的に取り組み、新薬をより多くの患者さんにお届けします。

 **NOVARTIS**

ノバルティス ファーマ株式会社

<http://www.novartis.co.jp/>